



巻 頭 言

農 と 自 信

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事
クミアイ化学工業株式会社 常務取締役
研究開発本部長

石原英助

首都機能移転の候補地として話題となっている那須高原には、開拓農家が点在している。この広大な地形は小北海道とも呼ばれ、酪農や水稻、高原野菜の栽培など多彩な農業が営まれており、その中の1つの開拓部落に、縁あって親しくさせてもらっている農家がある。この開拓部落は約50戸から成っており、終戦後、近くにあった旧陸軍の飛行連隊の将校の方々を中心にして開設された。

この度、入植50年を機会に、開拓回想録なるものを編集したとのことで、それを拝見させてもらった。50年の歴史はもうすでに三世の時代を迎えようとしており、各戸毎に1項をさいた家族史としてまとめられている。1戸当り5haを割り当てられ、雑木林の開墾からそれは始まっている。木株を抜き取る作業の過酷であったこと、初めての収穫のこと、また、家族にあっては出産や悲しい出来事などなどが各戸の歴史として記されており、感動と感銘を受けながら読ませて戴いた。特に夫妻2人での開墾を進めた作業の様子は、現代では想像を絶する程の苛酷な苦労であったであろう。子供を背に、乳飲子を畔におき農作業に取り組む姿を想像するとまるでセピア色の写真を見る思いであった。

その後、各戸それぞれの農業形態を選び、経営に取り組むことになる。酪農、養豚、養鶏、水稻、野菜など多彩な農業に挑戦してきている。まずは自給から始まった経営は、生活のための業とする農への取り組みに進歩して行った。その後の日本経済の発展とともにその形態にも、大きな変化変革が求められてきたが、現在、この開拓農家は静かなたたずまいの中にも、生き生きとした自信に満ちた経営が成されているのを見れば、農業のあるべき姿の1つの例とし

て存在しているような気がしてならない。一世の世代はもう80才を越えた方が大部分で、すでに他界されている方も多く今は二世に経営がゆだねられている。特に親しくさせて頂いている農家の老夫婦の奥さんの腰のまがり、ご主人の赤銅色の顔と指の太さを見ていると、厳しい労働の歴史が軀の中に存在しているように思える。

ここでは、戦後の食糧増産時代から現在までの農業技術の進歩について、実体験からの証言を得ることができる。家畜や作物の品種改良の変遷、農機具の進歩と低価格化、農薬の貢献など生きた証人としての体験談が聞ける。過去にこの開拓農家の方達の経営の相談にのつたことが縁で今も親しくお付き合いをさせて戴いている。親しさゆえに家族で訪ね、新鮮な野菜や果物を馳走になったりと自然を満喫させてもらっているが、しかし、一方では食の生産過程をも知らず、他国にその生産の半分以上を委ねている我国では農がどのように理解されているのであろうかと思料することがある。

今世紀は食の世紀とも言われている。爆発的に増加する人口を限りある耕地で賄うためには、科学の進歩のみで対応できるものではなさそうである。最も重要なことは食を生産する農への国民的な理解と支援と真の価値観の構築であろう。

農という字句が教育、行政、政治、経済、などの面から軽んぜられ消滅しようとしている現実をどう回復させるのか、今ほど国民的な論議が必要な時はないのではないだろうか。この開拓部落の子供には喧嘩はあっても苛めはないと聞く。何らかの目的と自信をもっている集団では心の健康をも保ち続けているのかも知れない。農を行う側もまた考える側でも自信と勇気が必要な時ではなかろうか。